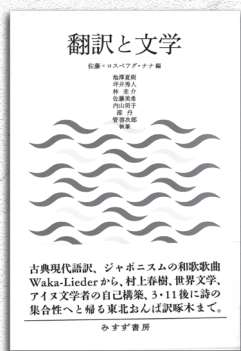


秋草 俊一郎



佐藤＝ロスベアグ・ナナ編

翻訳と文学

みすず書房、2021 年

トランスレーション・スタディーズ

本書は現在の翻訳研究のひとつの中心である英国のロンドン大学にて、研究を主導する立場にある佐藤＝ロスベアグ・ナナ編による翻訳と文学をめぐる論集である。編者の立場を考えれば、本書に昨今の、本邦における翻訳研究の最前線の成果の紹介を期待したくなるところだろう。『れにくさ』は学術誌であるし、評者の関心ももっぱらその点にあった。

しかし本書をひもといてみると、かならずしもそういった傾向の文章だけではないようだ。編者による「はしがき」のあとは作家の池澤夏樹による「編纂・翻訳・創作——文芸論の序説のためのメモ」が掲載されているが、これはエッセイである。後に触れる邵丹の論でも池澤夏樹の翻訳者としての功績は取りあげられているのだから、七〇年代から八〇年代前半までの池澤が翻訳家としてもっとも活動していた時期もふくむかたちで、誰かにきちんとしたインタビューをしてもらって、それを読みたかったところである。

その後、前半は文学研究者の文章が並んで掲載されている。坪井秀人「ジャポニズム／モダニズムの交差点としての＜和歌歌曲＞」と林圭介「五つの「ぼく」たち——村上春樹文学を世界文学に変える『図書館奇譚』」である。特に坪井の論は資料を博搜した力作であり、本書の中でも最長の論考だが、どちらも通常の文学研究の問題意識を出ていないように思えた（前者は比較文学研究、後者は村上春樹研究といううちがいこそあれ）。言いかえれば佐藤＝ロスベアグが「はしがき」で述べるような現今の翻訳研究の問題意識が共有されている形跡はうかがえなかった。

後者の論はダムロッシュの「世界文学とは、翻訳を通じて豊かになる作品である」という言葉を引用しているが、この引用が濫用されていることは別の書評で指摘した通りである（「郭南燕著『志賀直哉で「世界文学」を読み解く』：（作品社、二〇一六年）『比較文学』59号、2017年）。このロジックをもちいれば、翻訳されればなんでも「世界文学」になってしまい、その背後にある出版資本主義やイデオロギーは不問に付されてしまうのだ（実際、村上作品が繰り返し翻訳さ

れ、逆輸入されるのも、第一に広範なファンの購買力に支えられて売れるからであり、それをいちいち作品がすぐれているから、世界文学だからなどと論じていたらそれこそ自家撞着であろう)。問題の一端は、ダムロッシュほか欧米の世界文学の議論が、暗黙の基礎としてきた九〇年代以前の翻訳研究の（特に広範な人文学研究を反映する形で行われた）重要な文献が日本ではあまり翻訳紹介されず、翻訳をめぐるイデオロギーや国際的な力学についての議論に日本の文学研究者がなじみがないからではないかと思われる。

他方で本書後半の論者は翻訳研究の議論をふまえた上で論を展開している痕跡がうかがえ（内山明子『『新青年』の文学的展開——森下雨村と「探偵小説」の翻訳』は直接的には枠となる理論を用いていないが、これは最近流行の『新青年』研究ものの一環と見なせる）、より編者の意図にそうものだったのではないかと思われる。中でも「世界文学全集」における非西洋文学の系譜を、新潮社による円本版『世界文学全集』周辺から一九五〇年代まで概観する内容の佐藤美希「『世界文学全集』の西洋と非西洋」は、本書でもっとも翻訳理論の枠組みを意識した論文になっている。『世界文学全集』の対抗馬として刊行された改造社『世界大衆文学全集』などをとりあげて、「娯楽」性を押しだし、その中に中国の白話小説等が収録されていることを指摘している点などの指摘は興味深い。

しかし本テーマで書くのであれば、近年出版されたいくつかの先行研究への言及が欠けているようにも感じられた（たとえば円本以前の中国文学の日本における叢書化について触れた上原究一「近代日本における漢文または漢籍の叢書について——その位置付けと盛衰」（『文学』2016年9月号）や、戦前から戦後までの主な世界文学全集における国別のおおまかな割合を算出した拙論「カノンをはかる——『世界文学全集』に見る各国別文学の受容の移り変わり」（『世界文学』120号、2014年）など）。

また佐藤の論では、戦後の新潮社『現代世界文学全集』の月報における社会主義リアリズム的な農村作家趙樹理のあつかいが議論されるのだが、ここで取りあげられている題材自体は私が昨年上梓した著書『『世界文学』はつくられる——1827—2020』（東京大学出版会）で言及したものと同じである。ただ実はよく読むと本論は二〇一六年にクアラルンプールと二〇一七年にロンドンで行われた学会発表がもとにしているようなので、少なくとも学会発表当时には参照できなかったのは理解できる。しかしそうであっても本書で活字化するさいには注で言及してもよかったのではないかと思えるがどうだろうか（なお2014年の論文に関しては発表時点でも参照可能だったはずだ）。過去の学会発表の活字化ならば（しかも学会発表からは四、五年が過ぎている）、そのあいだに発表された研究をどこまで参照するのは難しい問題にはちがいない。それらは措くとしても佐藤は趙の文学の収録をナショナリズム意識の反映だとするのだが、そもその背景に戦後の東西冷戦があったことに触れないので隔靴搔痒の感は免れない。

邵丹「Welcome to the Monkey House——日本におけるカート・ヴォネガット文学の受容」は、ブルデューの理論を枠組みとして援用した文学社会学的な佳作論文である。邵の論は六〇年代から七〇年代にカート・ヴォネガット・ジュニアが受容される過程で、SF畑やアメリカ文学アカデミズム、同時代の文壇をどう変容させたのかを描いたもので、ある程度はSFやヴォネガット

に親しみのある人間なら既知の事柄ではあるが、すでに半世紀前の出来事として歴史になりつつある以上、このような総括は有意義だろう。ちなみに邵は、七〇年代にヴォネガットが再発見される際の、アメリカ文学系のアカデミズムの人間の態度を「傲慢」であり「怠慢」であると断じているが（そしてそれはある程度までは正しいが[一九三頁]）、そもそも英米文学者にかぎらず、六〇年代～七〇年代の外国文学者は、現在ほど留学も一般的ではなく（当然語学力もばらつきがあった）、現地の情報の入手経路もかぎられ、「学術研究」というものに対する意識や、SFやミステリといったジャンル小説に対する見方も現在とは相当に違ったのである。つまり、現在の文学研究者とはハビトゥスがちがった（またSFファンダムの側でも「大学の英文科の先生」に対する反発も現在よりも強かったのではないか）。日本の外国文学研究が学術的に洗練され、ジャンル小説にも目配せするようになるのは、まさに本論でもその論考が重要な先行研究として取り上げられている異孝之を中心とした世代の文学者の登場を待たなくてはならなかったのである。

編者である佐藤＝ロスベアグの「証しの空文——鳩沢佐美夫と翻訳」は、早逝した作家鳩沢佐美夫の自伝的な短編「証しの空文」をとりあげ、主にそこに見られる「私」と祖母の関係性を「翻訳」という観点からとらえようとしたものである。差別や植民地支配、アイデンティティポリティクスの問題を浮かび上がらせているのだが、分析や結論は正直なところ予定調和に映った。「翻訳」の問題を掘り下げるのなら、たとえばほかの同時期の地方出身者の作品とどうちがうのかといった問いも視野に入れなくてはならないだろう。また、このようなテーマでアイデンティティの構築性をあつかうのであれば、そもそも「文学」はその議論にどこまで必要なのかも問われるようになるだろう。

末尾におかれた菅啓次郎「詩、集合性、翻訳についてのノート」は著者自ら「ノート」としてしまっていることからわかるように、学術的なものというよりは、詩人の立場から執筆されたエッセイ的な内容だ（いつもの菅節と言おうか）。そのため本書評の関心から外れるため、詳しく論評しないが、『翻訳と文学』という書名を見て本書を手にする一般読者がいると想定したとき、実は一番期待に沿う内容かもしれない。

最後に、本書全体について論評してみる。個々の論考はそれなり有意義であり、それぞれに学ぶべき点はあるが、読了しても全体のコンセプトは一体なんだったのか途方に暮れてしまったことも事実である。それは『翻訳と文学』という曖昧模糊としたタイトルにもあらわれてしまっている。以前列の書評で、論集などで世界文学という言葉が、お手軽に学際性を演出するためのマジックワードと化してしまっているという批判をしたことがあったが（「坪井秀人・瀧井一博・白石恵理・小田龍哉編『越境する歴史学と世界文学』（臨川書店、二〇二〇年）」『比較文学』第63巻、2021年）、翻訳も同様である。翻訳やアダプテーションについても論集は近年数多く編まれているが、そういった類書と比べても本書のコンセプトはとりわけ曖昧に思える。たとえば過去に出版された同編者、同出版社の論集『トランスレーション・スタディーズ』（2011年）よりもコンセプト的に後退してしまったととれる。

このような曖昧な共著書は、仲間内の結束を固め、業績作りには役立っても、学問の進展にどこまで寄与するのだろうか。それこそ今からでもまだ未訳の翻訳研究の基礎文献を訳出した方が、

生産的な議論に貢献するにちがいない（なんらかの理由でそれが難しいのなら、むしろそのこと自体が翻訳研究のテーマになるだろう）。曖昧なコンセプトの論集を量産すれば、そもそもディシプリンの輪郭がぼやけてしまうことになるし、今まで人文書を買いささえていてくれた忍耐強い非アカデミズムの読者もはなれてしまう結果になるだろう。研究を主導する立場にある人間や、出版社には考えてみてほしいところである。